

戦時を支えた女性たち



▲昭和17年頃、戦線に送る物資「慰問袋づくり」に精を出す赤岡国防婦人会。慰問袋には、日用品(ちり紙、手拭い、石鹸など)、衣服付属品(シャツ、腹巻きなど)、食料品、薬品、写真、絵画、お守り札などが入っていた。

毎年、広報8月号では、8月15日の終戦記念日に合わせて、戦争の記憶を風化させないために、平和について考える特集を組み、市内で起こった悲惨な事件や体験談を紹介してきました。

今年は、戦時中の女性、中でも市内の女性の生活に視点を置き、自由を奪われながらも、一生懸命に生き抜いてきた女性の生きざまから、今に生きる私たちは、何を学ぶのか。そして、戦争の事実を語り、平和を祈る女性たちの言葉を後世に伝えるため『香美の女たちが語る こんなこともあったぞね』に掲載された、1人の方の戦時中の話と、同書に掲載された2人の方に伺った体験談を紹介します。

と、祈る気持ちで立っていました。

まもなく、靴音高く武装した熱気あふれる多くの兵士が出てきました。どこにいたのか大勢の見送りの人がおしよせてきました。これが今生の別れになるかもしれないのです。会いたさに息子や夫を探し求めて、必死に呼ぶ声、叫ぶ声が錯綜し、駅前には喧騒に包まれました。わずかな時間、しかも暗闇の中、果たして何人の人が思う人に会うことができたのでしょうか。私は切ない別れの中にもひとときの幸運を得、言葉を交わすことができたことを感謝しました。

見送りの人に「ピー」と、高く強く汽笛を残し、秘密の出征兵を乗せて汽車は発つていきました。それは、窓もない列車でした。その時の汽笛の音とラッパの音は、今だに私の耳の奥底にずっと残っています。あの時のことは、昨日の出来事のように思われます。

夫の帰りを待ちわびて

終戦を迎え、まもなく復員が始まりました。夫の出征の地、フィリピンからの復員は早く、二ノノでマニラより復員船が着いたとたびたび放送されました。「夫は必ず帰ってくる」と信じて復員を待ちました。

眠られない夜、風の音にも、もしかや夫が門戸を叩く音かと、飛び起きて外に出たことも幾度かありました。ふと照る月を眺めては、かの地で夫を照らす同じの月、あの人はどんな思いをして眺めているのだろうか。もしかや病気でいな

かろうか、山の中で飢えているのでは、などと案ぜられ、できるものなら飛んで行って探したいけれど、ただじっと待つよりほかに仕方がありませんでした。

部隊長や中隊長は帰国しましたが、夫は生死不明。方々へ聞きに行きましたが、はきりしたことは分かりませんでした。

早く帰ればよいにと思っていた矢先、22年7月、戦死広報が届きました。どんよりと曇った空から、びしょびしょの雨の降る夕暮れ時でした。

私は泣き崩れ、呆然とならうてしまいました。年老いた両親と3人の幼子、この先どうしていけばいいのか、全く途方に暮れました。国からは戦死者に何の恩典もなく、野良犬の死同然、世間からは戦争犯罪人の如く見られる。男手のある家では、いろいろの農作物を作り利益をあげたりしていました。

父に抱かれた幸福そうなお子、また復員した家や召集を受けなかった家の奥様たちは、朗らかな笑い。私はひっそりと涙を噛み締めて、この時世に乗っていけない感じがしました。眠れない夜が続きました。年老いた父は氣力を失い、床に就く日が多くなりました。無心に眠る幼い3人の子どもの寝顔を見ながら、ひとりでに涙が湧いてくるのでした。これが食べられる頃には帰ってくるだろうと作った西瓜は、夫の霊前に供えなければなりません。初盆の夜、夫が家に帰ってきた夢を見ました。夫が家に帰ってきて、夫婦で

香美郡女性史作成の会編著の『香美の女たちが語る こんなこともあったぞね』に掲載された方の文章を一部抜粋し、広報編集委員会で編集したものを紹介します。

朝倉駅の別れ

(故 島内亀代(野市町))

結婚はしたけれど

私は昭和12年3月13日、17歳で結婚しました。夫はまじめで働き者、そして優しく男ぶりもなかなか良かったです。

しかし、その年の12月6日、夫は補充兵として朝倉の練兵場に入所しました。そして、翌13年4月24日、中国に派遣されました。その日は、親戚や近所の人、最寄りの駅まで行って見送りしました。そこで、夫は皆に挨拶をして出征しました。

現地からは、たびたび便りが届きました。私も封筒の中に、季節の草花や写真なども同封したりして出しました。昭和15年6月、夫は戻ってきました。しかし、マラリヤにかかっていたおり、よく高熱が出て、なかなか仕事をすることになりませんでした。



昭和18年12月、夫は再び召集されて朝倉に行きました。翌19年1月15日、「朝倉を今夜発つらしい」との知らせを受けたのは、午後4時頃でした。当時、私は24歳で3人の子ともがいました。6歳の長女、3歳の次女は連れて行けず、5カ月の長男を背負い、私は急がれるような思いで朝倉駅に向かいました。着いた頃には日が暮れていました。静まり返った駅の方に歩いていくと、一人の兵士が近づいてきました。それは思いもよらぬ会いたい、会いたいと願っていた夫でした。

夫は背の長男に「お利口で大きくなりよ」と言いながら、赤ん坊の柔肌の頬に手を触れていました。話したいことは山ほどあるのに、ただ私の胸はいつぱいになり、言葉が出てきません。すると、その時兵舎から夕闇の静寂を破って、けたたましく鳴り響く出陣ラッパの音が聞こえてきました。

「あ、もう兵隊が出て来る。親は年がいたし、子どもは3人になって大変だろうが、あとは頼むよ」と、緊張した顔となり、口早に言いつつ、夫は私の高ぶる胸の思いを断ち切る如く闇の中に消えていきました。その後姿を見送りながら、最後になるかもしれない。いやきつと帰って来る…どうか無事に帰ってきて

団子を食べたのです。夢からさめた時「夫の魂は家に帰ってきたのだ」と、そう思いました。あんなに元気で出征した夫の肉体は、一体どうなってしまうのだろうという、そんな思いが消えなかった。夫は生死不明でしたが、いくらか心安まる思いがしました。そして、この子どもたちをしっかりと育てることこそ、亡夫の慰霊になるのだと考えました。「何を犠牲にしても、子どもたちのために強く生きよう。私がメソメソしては、子どもたちがかわいそう。子どもたちには絶対涙は見せない」と、心に誓いました。

子どもたちに励まされ

本当に、涙にくれて立ち竦んだ時もありました。しかし、元気な子どもたちの声に励まされ、子どもたちに囲まれた毎日、大きな生きがいであり、また喜びの日々でもありました。決して悔いはないと思うのです。

けれど、この何十年を、あの優しかった夫と共に歩んでいたらどんなだろう。今、健康でいたなら、いたわり励まし合う老夫婦かと、ふっとそう思う時もあります。私たちの労苦に、国が支給してくれる遺族年金はありがたいことではあります。今さら何をしても、その償いはできないとも思うのです。

戦地に立つ

その後、私は二度、夫の戦死したフィリピンを訪れる機会を得て、その地に立ちました。

あとは頼むよ

昭和18年12月、夫は再び召集されて朝倉に行きました。翌19年1月15日、「朝倉を今夜発つらしい」との知らせを受けたのは、午後4時頃でした。当時、私は24歳で3人の子ともがいました。6歳の長女、3歳の次女は連れて行けず、5カ月の長男を背負い、私は急がれるような思いで朝倉駅に向かいました。着いた頃には日が暮れていました。静まり返った駅の方に歩いていくと、一人の兵士が近づいてきました。それは思いもよらぬ会いたい、会いたいと願っていた夫でした。

夫は背の長男に「お利口で大きくなりよ」と言いながら、赤ん坊の柔肌の頬に手を触れていました。話したいことは山ほどあるのに、ただ私の胸はいつぱいになり、言葉が出てきません。すると、その時兵舎から夕闇の静寂を破って、けたたましく鳴り響く出陣ラッパの音が聞こえてきました。

「あ、もう兵隊が出て来る。親は年がいたし、子どもは3人になって大変だろうが、あとは頼むよ」と、緊張した顔となり、口早に言いつつ、夫は私の高ぶる胸の思いを断ち切る如く闇の中に消えていきました。その後姿を見送りながら、最後になるかもしれない。いやきつと帰って来る…どうか無事に帰ってきて

炎天下に病になっても薬はなく、食糧はもちろん、飲む水さえもない異国の山野を、銃を担ぎ馳せて、ついに力つきいかなる思いでこの地に果てたのだろうかと、当時をしのべば惻々として胸に迫ります。私は、故国より持参した夫ゆかりの品と共に、我が家の井戸水も供えましました。どんなにかこの水を飲みたかったことでしょうか。

ルソン島に 末期の水も 飲まずして 夫逝きしかと 真水供えぬ 遺骨さえ届けられなかった夫は、どの様にして命果てたのだろうと思うと、涙はとめどなく流れ、香の煙が静かに漂う中、心から冥福を祈りました。それは戦後40年目のことでした。

子や孫へ伝える

先の戦いは、大きな犠牲を払いましたが、その後、日本は平和と豊かさを手に入れました。我が家も、痛んだ家を新築することもできました。

しかし、この豊かさの中で、若い人たちが心貧しく悲しい道を巡るニュースを聞くと、胸が痛みます。そして、今また自衛隊員が家族に見送られて、イラクに派遣されて行くニュースをテレビで見る時「これは、本当にお前(こ)になった」と思うのです。私は、子や孫のために心から平和を願っています。

(聞き取り者 依光浩美)